

メイド・ナード学的遠野家研究小論

阿羅本 景

遠野秋葉は遠野邸に来たばかりの志貴に、こう言つている。

「兄さんだつて親戚の人達と屋敷の中では会うのはイヤでしよう? 使用人も大部分に暇をだしましたけど、私と兄さん付きの者は残してありますから問題はありません」

と。これに対して、身の回りの使用人という物の存在を実感できない我々現代日本人は、「ふーん、そんなものか」ぐらいにしか考えることは出来ない。

この秋葉の執つた処置が果たして賢明な物であつたのだろうか? また、二人を世話する翡翠と琥珀の仕事はどうなのであらうか? それをメイド・ナード学的な立場に立ちながら、肩の力を抜いて考えて見ることにしたい。書き出しは非常に面白目な様にも見えるが、内容はそれでもないので読者の皆様には安心されたい。

さて、秋葉の大首切り＆同族追放政策の後、遠野家に仕える使用人は、秋葉や志貴の幼なじみである琥珀と翡翠の双子のメイドさんである。琥珀は和服十割烹着、翡翠は洋装のメイド服という實にこの現代日本にしては實に趣味的な選択であり、この点だけは諸悪の根元でありペドフィリアであったとしても、先代の遠野楨久の趣味を誉めるべきであると思う。

きっと、秋葉などに任せたらその辺の飲食店制服カタログから適当に選ぶ事であろう。その点、喩え変態であつても楨久の、和装と洋装を組み合わせるという趣味は高く評価されるべきである——閑話休題。非常に重要であるのだが、制服のことはこの際置いておく。琥珀は何着物を持つてゐるのかとか、翡翠のクロー

ゼットの中とかそういう話は非常に興味深くあるのだが、今回は泣く泣く割愛させていただく。

使用者二人で世話をするのは、遠野秋葉とその兄・志貴である。シナリオによつては座敷牢の四季(シキ)の存在もあるのだが、取りあえずは考察から外させて頂く。使用者と使用者の比率が一：一。この雇用の関係は、果たして適正な物であるのか?

遠野家の家電化の状況が十分に進んでいるという前提があるのであれば、この比率は使用者側の負担は高くない、と考えるのが無難である。

十九世紀末から二十世紀初頭の歐州では、一人の紳士や淑女を養い、体面の保つ生活をするには最低二～三名の使用者が必要であった。しかし、これはガス・水道・家電化が進んでいない世界での話である。さらに、従僕がいないと外も歩けない、というような社会的な風習の差があるので、直接の比較とするのは難しいかも知れない。

秋葉は家事の力の字も知らないお嬢様であるし、志貴も秋葉よりマシだとして家事にあまり長けていいるとは思えない。だが、この二人の生活の身の回りの世話をする、義務教育も受けずに女中業に励んでいた翡翠や琥珀にしてみれば容易なことであると思える。

まず、志貴は生への執着が薄いために身の回りに無頓着の人間であるので、お付きのメイドである翡翠にはあまり手に掛からないものと考えられる。問題はお嬢様の秋葉であるが、中学時代に全寮制の寄宿金育ちであつたことと、いくらお嬢様とはいえ一日五回着替えをして、毎晩晩餐会や舞踏会に出掛けるような十九世紀

の貴婦人に比べれば、ずっと手に掛からない存在であったことであろう。

さらに、秋葉と志貴が学生であるということも負担を軽くしている。朝から夕方まで屋敷に居ない、というのは、他の仕事に裂ける時間がが多いことを示している。もし、秋葉が館から出ない生活を送っていれば、琥珀の負担は倍増することであろう。

秋葉と志貴の身の回りの世話、ということでは翡翠・琥珀はさして負担にならない。
もし、負担になるとしたらどの辺りの仕事が考えられるのだろうか？

まず、かつての専門のメイドが居るほどの難事業である洗濯だが、まさか遠野邸の使用者スベースに洗濯機が無いとは考えられない。さらに、秋葉も志貴も大量の衣類を消費する訳でもなさうなので、仕事は手間ではあっても問題になると考へにくい。

従僕や客間女中が必要であつた来訪客への応対と言う外回りの仕事は、当主の秋葉の性格を見ると、その手の仕事 자체がほとんどなくなっているのではないのかと思われる。なにしろ、同族を追い出した秋葉にそう頻繁に訪問客があるとも考えにくい。

そうなると、問題になりそなのは翡翠と琥珀のそれぞれ専門分野の仕事になる。
まず、琥珀の独擅場である料理であるが……遠野家のキッチンを見ると普通の家庭のシステムキッチンとほとんど変わりがない。

あの館の規模にしては、非常に小振りなキッチンである。たとえば、ある英国のカントリーハウスのキッチンは、下のような大がかりな物である。

このような感じである。もし、このような広大なキッチンを琥珀一人が任せられたのであれば、そのキッチンを切り盛りするのは非常な負担であつたことは想像に難くない。



ハンプシャー州ミンレイ・マナーのキッチン
(1890年代撮影)



デヴォン州セルトハム・ハウスのキッチン
(1885年撮影)



だが、幸い遠野家のキッキンに関しては、秋葉の縮小政策の際に閉鎖され、今の小振りな使用人用のキッチンのみで調理が行われているという。さらに、料理に関しては秋葉と小食な志貴、それに翡翠と琥珀の四人だけを考えればいいので、料理を得意とする琥珀の負担はあまり大きくない、と言つことが出来るであろう。

そうなると、残るのは翡翠の領域である清掃の仕事である。実際、往事には清掃業務のためにかなりの数の家女中が雇われており、清掃は女中必須の業務であると言える。

さて、ここでその対象となる遠野家の構えを振り返つてみると……

……巨大である。作中でも「小さな病院並」と言われているが、画面から両翼が切れている事からも、この屋敷が全国各地にある個人宅の洋館を凌駕する規模であることは想像に難くない。皇居の側の国立近代美術館工芸館ほどは大きくななくても、おそらくは三田の三井俱楽部以上の大きさはあると思う。なにしろ、往時には数家族が同居できる広さであったのだから。

それを清掃するのは翡翠一人の仕事である。

この仕事に関しては、琥珀がノータッチであることは作中でも述べられている。これは、容易ならざる業務であると言つて過言ではないだろう。考えても見ていただきたい、九〇〇坪をなんなんとする屋敷を一人で掃除するという激務を。少なくとも、筆者は毎日毎日そんなことをしたくはない。

ここで、遠野家は縮小政策のために多くの部屋を開鎖したから、翡翠の仕事には問題ないのではないか?と仰られるかも知れない。でも、重要な問題がある。

秋葉の措置で部屋を多く閉鎖したにも関わらず、遠野家の面々はそれぞれ館の各階各翼に分散して部屋を構えているのである。つまり、部屋は閉鎖されても廊下や通路などのスペースはそのまま残るのである。さらに、応接間やホールなどの共有スペースはそのままである。

片翼なり二階なり全面閉鎖して、一角に秋葉や志貴がまとまって住むのであれ

ば翡翠の負担は減ったのであろう。しかし、分散して住んでる……故に、閉鎖の措置は翡翠の仕事にとっては焼け石に水ではないかとも考えられる。

さらに、部屋を閉鎖したと言つても日々掃除をして手入れをしないと、家屋といふものは想像以上に痛むものである。ただの倉庫部屋ならともかく、遠野邸は由緒ある洋館の部屋なので、内装を保護する意味でも定期的な清掃や手入れは欠かせない。

その上、内装にも様々な意匠や彫刻が施されていることも、遠野邸では想像にかたくない。家具調度などの手入れも含めると、翡翠の仕事は増えることはあっても減ることはないのではないかと思う。

また、広大な遠野邸の敷地の庭園の清掃も付加される。もちろん定期的に庭師が入ることや、これは琥珀が行うこともあるようであつたが、これにより翡翠の仕事量は絶望的な物になつたと推測される。

§

この翡翠の肩に掛けられた清掃の重責が、もしかすると遠野家の悲劇の遠因であつたのかも知れない。

秋葉が大量に使用人を辞めさせたことにより、翡翠の上に課せられた清掃の業務は莫大な物であった。秋葉はそれに対して館の一部を閉鎖する措置を行つたが、それが清掃の業務に対する合理化になり得ない対策であった。

一方の琥珀は、厨房の縮小移転によって業務的なメリットを得ている。さらに、琥珀は掃除が全く出来ない——この事実を見ると、むしろ計算高い琥珀が「掃除が出来ないフリ」をしていることも考え方であるから、この双子の姉に対する不満があつたであろうことも否定は出来ない。

その為、この事態を招いた秋葉と負担を共有しない琥珀に対しての無言の軋轢が深まつて行き、秋葉の暴走や琥珀がの暗躍していても無関心を装うこととなつたのではないかとも考えられなくはない。あまり考えたくないものであるが。

翡翠が積極に動いていれば、琥珀の暗躍は阻止された可能性が高いことを考えると、翡翠が掃除に忙しすぎてそういうことをしている暇がなかつた、という考え方も出来よう。それもまた、実に殺伐とした考え方ではあるが……

もしこの仮説が正しいのであれば、こう言うことが出来よう。

秋葉が幸せにお兄さまである志貴と一緒に過ごしたいと思っているのであれば、秋葉が取るべき行動は館の同族と使用者を追い出すことではなく、翡翠と琥珀を連れて志貴のいる有間家に押し掛け妹になることではなかつたのではないか。と。

§

§

さて、最後に、秋葉が辞めさせた使用者がどれくらい居たのかを推測することにしたい。元々の遠野家の使用者についての明確な記載は無いが、古風な趣味の先代の楨久が英國の上流階級並の使用者を雇っていたと考えると

執事	一名
・従僕	
・侍女	
・女中頭	
・子守女中	
・料理人	一名
・料理女中	三名
・家女中	六名
・園丁	三名
・運転手	二名

ぐらいは居たのではないかと考えられる。なお、洗場女中は家女中と料理女中共の業務とし、蒸留室女中／食器室管理人のような現在では不明瞭な職務は省いている。客間女中に関しては含めるかどうかを悩んだが、ここでは数には入れていない。また、それぞれの同居人の同族の子供に閑する年齢の記録がないので、乳母と子守女中に関しても推測であるとする。

あくまで推測であるが、全盛期の遠野家では広大な屋敷を、二十人をなんなんとする使用者達によって運営されていたのではないかと思われる。

これを、兄さんと水入らずで過ごしたい、という理由で首切り断行をした秋葉

……高校一年生にして中小企業の従業員並の規模の遠野家使用者解雇を行うという、それだけの行動と決断力を持つというのは未恐ろしい限りがある。しかし、そういう理由で暇を出される使用者達は堪つたものではなかつたのか？とも思われるるのであるが……やはり、この使用者達は遠野家の分家で次の仕事を見いだしたのであろうか？疑問は尽きない所である。

§

§

メイドさん学的な翡翠と琥珀考察結論としては……結局、なにかと秋葉の暴挙ばかりが目立つのではあるが、翡翠が超人的な清掃能力を持つていれば不可能ではない、と言ふところであろうか？

色々と極論になる部分もあつたが、ここまでお付き合い戴いた皆様には感謝の言葉を以て締めくくりの言葉とさせていただきたい。どうも、お読みいただき有り難うございます。

§

§



げんま